

中学校長会会長賞

堺市立 浜寺南中学校 三年

佐藤 穂乃

出会い

誰も求めていないはずなのに、完璧でないと、皆に好かれる人でないと、と思い込んでいる私が出た。優秀じゃない私なんて誰も必要としてくれないと思っていたからだろう。実際、その頃の私は先生からも、友達からも頼られていて、「真面目で頭が良い女の子」というイメージはかなり強かったと思う。その反面、心の中ではどんどん本当の自分が圧縮されているような感じがあった。

でも、その思い込みを変えてくれたきっかけがある。それは、中学校への入学だった。良い友人や先生にめぐり会えて、ありのままの私でもいいんだと思えるようになった。自分なりに努力して、自分なりに正しいと思える道を進むことは生きていく上で一番といってもいいほど大事だと気づかされた。

私は最近初めて、「社会を明るくする運動」について知った。犯罪や非行の防止や、それをしてしまった人の更生について理解を深めて、犯罪や非行のない明るい地域社会を築くための運動なのだそう。しかし、本当に犯罪を防いだり、そのような人々を更

生させたりすることができるのだろうか。正直、私は難しいと思う。だが、それを決めるのは「きっかけ」があるかないかの違いだと思う。

ある時、ニュースを見てみると、犯罪者の更生についての特集が放送されていた。元犯罪者のAさんが、ある中小企業の社長に拾ってもらい、衣食住やその他の援助をしてもらいながら社会復帰を果たす、というものだった。この場合では、Aさんは社長との「出会い」によって、社会復帰へのきっかけを手に入れることができたのだと思う。

しかし、きっかけというものはそう簡単に手に入れられないものだ。実際、刑務所から出所しても帰る場所をもうすでに失っている、昔絡んでいた不良仲間ともう一度関わってしまい、再入所することになってしまったというのはよく聞く話だろう。Aさんのように社会復帰ができる人を増やすのは、社会の人々が、「出会い」というきっかけを作るための環境づくりを進めることが大切だと思う。

例として述べた社長のように、変わろうとしている人に手を差しのべる機関や人物はあるはずだ。それなのに立ち直りができない人がいるのは、「出会い」の少なさが問題だ。もしもっと「出会い」を増やすことができれば、再出発したい人が再出発できる社会がつかれると思う。苦しかった私も新しい「出会い」を手に入れることで楽になった経験がある。この、「出会い」の少なさの問題を解決するためには、私たち社会の人間が、まず心から更生したいと思っている人がいることを知って、その人たちを助ける様々な方法が存在することを理解してあげることが第一である。この、「社会を明るくする運動」を通して、それらを知る人が増えればいいと思う。また、私も大人になったら、更生したいという気持ちが尊重される社会づくりのために、できる活動をして、「出会い」を増やしていきたいと思う。「出会い」を増やすことができれば、もっと更生したい人が生きづらさを感じないで立ち直れると思う。

